2 月 19 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　9：　10 – 17

「あなたがたが与えなさい」

大切な試験の前に奇跡を願ったことがあります。何とかして合格したいとの思いがそのように願わせたのでしょう。願いが叶えられたときもあれば、叶わなかったときもあります。叶った時は「奇跡だ」と喜び、そうでない時は神を呪ったこともあったかもしれません。

聖書には様々な奇跡の場面が描かれます。

モーセが神に祈り願うと海が割れるというのは、最も奇跡らしい奇跡と言えるでしょう(「モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。」出エジプト記 14:21)。ローマへと移送されるパウロが、暴風の中、助けられたのも奇跡と大きな言えるでしょう(「パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。」使徒言行録 27:25-26)。

それほど大げさなものばかりではありません。

アロンの杖が蛇に姿を変えるのもまた奇跡です(「もし、ファラオがあなたたちに向かって、『奇跡を行ってみよ』と求めるならば、あなたはアロンに、『杖を取って、ファラオの前に投げよ』と言うと、杖は蛇になる。」出エジプト記 7:9)。パウロが蝮に絡みつかれても何の被害も受けなかったこともまた奇跡です(「パウロが一束の枯れ枝を集めて火にくべると、一匹の蝮が熱気のために出て来て、その手に絡みついた。」使徒言行録 28:3、「ところが、パウロはその生き物を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった。」使徒言行録 28:5)。

「それでは、何でも奇跡ではないか」と思う者もあるかもしれません。そう、実際にそうなのです。

私たちは自分に都合の良いものを奇跡と呼び、都合の良くないものを奇跡ではないと排除しますが、「全ては神の業」であるならば、「全て奇跡」なのです。神は、調子の良いときも良くないときも、たとえ困難の中に置かれたとしても、決して人間を見捨てられることはないのです(「あなたはわたしの僕／わたしはあなたを選び、決して見捨てない。」イザヤ書 41:9)。

ただ、一つだけ、聖書における奇跡に共通しているのは、「人間が前を向いている」ということです。自分中心に、自分にとって都合の良い奇跡を願っても、それが叶えられることはありません。ただ神の方を見つめ、神に信頼して手を伸ばしたとき、奇跡は起こるのです。

だから、イエスは十二人を前にして、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」(ルカによる福音書 9:13)と言われます。神の力も信じ切れず、「群衆を解散させてください」(ルカによる福音書 9:12)と後ろ向きの発言しかできない弟子たちに、前を向かせるために。「あなたたちこそが、奇跡の担い手となっていくのだ」と呼びかけられます。

それでもなお、弟子たちは尻込みします。私たちに与えられているのはほんのわずかしかないのだから無理だ、と。小さな手には小さな働きしかできない、と(「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買いに行かないかぎり。」ルカによる福音書 9:13)。

なおも神を信じられない弟子たちに、イエスは自ら奇跡を示されます(「すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。」ルカによる福音書 9:17)。与えられている分は十分なのだから、神を信頼せよ、と。神はいつも私たちを助けてくださるのだから、安心して全てを委ねよ、と(「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」詩編 46:2)。そこに必ず奇跡は与えられるのだから、恐れず一歩を踏み出せ、と。

「あなたがたが与えなさい。」イエスの言葉が私たちにも聞こえてきます。私たちに与えられている分を、存分に生かす、生かし切る私になりたいと願います。